

泣かなくてもよい

ルカの福音書 7章 11-17節

はじめに

今日は、「召天者記念礼拝」です。この教会の教会員またはその家族で、先に天に召された方々を覚えて、神様を礼拝しています。この「召天者記念礼拝」では、私たち人間の「死」という問題を改めて考えさせられます。「死」は、私たち人間にとって避けられない現実です。私たちも、また私たちの愛する者たちも、やがて「死」を迎えます。そして「死」は、私たち人間にあらゆる悲しみや苦しみ、そして恐れをもたらします。しかしイエス様を信じるクリスチャンにとって、「死」は決して、「絶望」ではありません。イエス様は、私たちの「死」という問題に、「希望」を与えてくださるために、神様からこの世に遣わされて来られた方です。イエス様の十字架の死と、死からの復活は、まさに私たちに、「死」に対する「希望」を与えてくれるものです。

1. 一人息子を失った母親

イエス様はある時、「**ナイン**」という町に行かれました。イエス様の「**弟子たちと大勢の群衆も一緒**」でした。イエス様と一行が、その町に入ろうとすると、町の中から大勢の人々が町の外へと出て来たのです。その大勢の人々は、葬儀に参列している人々でした。ちょうど、遺体を町の外の墓場に運んでいる最中でした。

この葬儀は、ある一人の「**若者**」の葬儀でした。そしてこの葬儀で、人一倍、泣き悲しんでいる人がいました。それは、その若者の「**母親**」でした。この母親にとって、この若者は、たった一人の「**息子**」でした。彼女は、たった一人の大切な息子を若くして亡くしたのです。親にとって子どもを失うことは、耐え難い苦しみです。多くの人は、親を亡くすことはあっても、子どもを亡くすことはありません。その悲しみは、周囲の人には理解されない悲しみです。

しかも彼女は、すでに夫を亡くして「**やもめ**」となっていました。夫を亡くした時も、深い悲しみがあったことでしょう。ようやく立ち直ろうと、息子と二人で前を向いて生きていこうとした時に、最愛の一人息子まで奪われていく、彼女の悲しみはどれほど深いものであったか、想像を絶するものがあります。なぜ彼女ばかりに、こんなにも悲しみが続くのか、周囲の人はかける言葉さえ見つからなかったと思います。町の人々は、ただただ彼女に寄り添い、葬儀に参列する他なかったのです。「神様は不公平だ」「神様がいるなら、なぜこんなにも彼女を苦しめるのか」、目の前の「死」の現実に対する怒りと悲しみが、彼女と町の人々の中に渦巻いていたのではないのでしょうか。

2. 深くあわれみ

イエス様は、葬儀の中で泣き悲しんでいる母親を見て、「**深いあわれみ**」を持たれました。この「深くあわれむ」という言葉は、他の個所で「かわいそうに思う」と訳されています。しかしこの時、イエス様が抱かれた「あわれみ」は、上から見下ろすような「あわれみ」ではありません。この言葉は、「内臓」という意味の言葉の動詞形で、「内臓が食べられるような様子」を意味します。ですから、ある聖書では「はらわたがちぎれる思いに駆られる」とも訳されます。つまり「腸がちぎれる」ということです。私たちがもし、「腸がちぎれた」ら、激痛のあまり、のた打ち回ります。救急車を呼ばなければなりません。イエス様が彼女に対して抱かれた「深いあわれみ」というのは、そのような激しい心の痛みなのです。居ても立ってもいられない、激しい心の痛みなのです。私たちが他人に対して抱く「あわれみ」とは、レベルの違う感情なのです。ですから、聖書の中では、この「深いあわれみ」という言葉は、イエス様にしか使われない言葉です。つまりイエス様にしか抱くことができない、激しい心の痛みを伴う感情なのです。

この言葉は、聖書の中で12回出て来ますが、イエス様は一体、どのような人に対して、この「深いあわれみ」を抱くのでしょうか。一つは、弱り果てている群衆に対してです。空腹や貧しさの中にある人々に対して、また病気に苦しむ人々に対してです。さらにイエス様は、強盗に襲われて半殺しにされた人々に対して、子どもの問題に悩み苦しむ親々に対して、子ども自身が人生に彷徨っている時も、「深いあわれみ」を抱かれました。

13節を見ると、「**主はその母親を見て深くあわれみ**」とあります。ここでは、イエス様のことを「主」と表現されています。「主」というのは、神様のことです。神様は、「深くあわれむ」方である、「激しい心の痛みを伴う感情」を抱く方であるということです。私たちは、神様をどうの方として見ているのでしょうか。この時代のギリシア人は、神というのは、感情を超越した存在だと考えていたようです。感情というのは、あくまでも人間的なもので、感情に左右される神など、神に値しないと考えられていたようです。私たち日本人は、神という存在をどのように見ているのでしょうか。先祖や自然が神となると考える私たち日本人は、神にも感情があると考えているのでしょうか。聖書は、唯一の真の神様は、感情を持つ方だと教えています。しかも、弱り果てている者たちに、貧しさの中にある者たちに、病気に苦しむ者たちに、子どもの問題に悩み苦しむ親たちに、人生に彷徨う子どもたちに、「深いあわれみ」を抱き、激しい心の痛みを伴う感情を持つ方だと教えているのです。

イエス様は、この「深いあわれみ」のゆえに、この母親の一人息子をよみがえらせます。これが今日の聖書箇所に出てくる奇跡です。しかしイエス様は、今日の聖書箇所、この母親に対して、何一つ求めていません。「あれをしなさい」「これをしなさい」とは、一言も言われません。通常、イエス様が誰かの病気を癒したり、死者をよみがえらせたりする時は、当事者やその関係者に「信仰」を求められます。イエス様を「神の子」と信じ

ること、イエス様には病気を癒したり、死者をよみがえらせたりする力があることを信じることを求められます。しかしここでは、母親に「信仰」は求められていません。ただイエス様の一方的な「深いあわれみ」によって、彼女の一人息子をよみがえらせたのです。このことは、私たちに何を教えているのでしょうか。私たちには、深い悲しみの中にある時、激しい苦しみの中にある時、「信仰」を持ってない時があります。あまりにも心配で、あまりにも不安で、イエス様に委ねることも、お任せすることもできない時があります。祈ることもできない、聖書を読むこともできない、礼拝に行くこともできない、そういう時があるかもしれません。何一つイエス様に求められていることができない、という時があるかもしれません。しかしそれでも、イエス様は一方的な「深いあわれみ」によって、私たちのために御手を動かしてくださる方であるということではないのでしょうか。イエス様の「深いあわれみ」は、私たちの「信仰」よりも遥かに大きいものです。イエス様は、御自身の「深いあわれみ」によって、自由に御手を動かし、自由に御業を成される方であるのです。

3. 「泣かなくてもよい」

イエス様は、この母親に対して一言だけ語ります。それは、「泣かなくてもよい」という言葉です。この葬儀に参列した大勢の人々は、彼女に寄り添いました。しかし、あまりにも彼女の悲しみが深いため、彼女の気持ちを考えれば考えるほど、かける言葉が見つからなかったのではないのでしょうか。

葬儀における「言葉」というのは、非常に難しいものです。深い悲しみの中にある遺族に対して、どのような「言葉」をかけるのかは、いつも考えさせられます。私には苦しい思い出があります。私が二十代の半ば頃、教会のある婦人のお母様が亡くなられ、葬儀に参列しました。葬儀も終わり、献花台に献花を置いて黙祷をして、最後に遺族に挨拶をして帰る時となりました。遺族に挨拶をする際、二十代半ばの私は、お母様を亡くしたその教会の婦人にかかる言葉も見つからなくて、ただ一礼をして帰って行きました。すると葬儀が終わった直後の日曜日に、その教会の婦人に声をかけられ、葬儀の際に一礼だけして、何も語らずに帰るのは失礼だとひどく注意されました。おそらくお母様を失った悲しみや怒りを私にぶつけたという一面はあったと思いますが、私はその時から葬儀の際の「言葉」というものにトラウマを持つようになりました。その後、私は牧師の道を志しましたが、牧師になる際に一番不安を抱えていたのは、「私は葬儀の際に『言葉』を語れるだろうか」ということでした。私の中には、今でも葬儀の際に語れる「言葉」はありません。人間の「死」という現実に対して、本当に慰めとなる「言葉」は、私たち人間の中にはないと思っています。人間の「死」という最も深い悲しみや苦しみ、そして恐れのある現実の中で、「人間の言葉」は何の役にも立たない、実に無力だと思っています。人間の「死」という現実の中で、本当の意味で慰めや励まし、希望を与えるのは、「神様の言葉」だけだと思っています。私が牧師になることができたのは、「神様の言葉」があるか

らです。「神様の言葉」を語るからこそが、牧師の務めであるからです。

イエス様は、誰もがかける言葉を失っていた、そんな状況の中で、母親に対して「泣かなくてもよい」と言葉をかけられます。「泣かなくてもよい」という言葉は、誰にでもかけられる言葉ではありません。多くの人は、「泣きたいだけ、泣きなさい」ということが、精一杯の言葉ではないでしょうか。なぜなら私たちには、その涙をとめる根源的な解決を、彼女に与えることはできないからです。しかしイエス様は違います。イエス様には、彼女の涙をとめる、彼女の涙をぬぐう根源的な解決を与えることができるのです。

4. 近寄って棺に触れられる

14 節を見ると、イエス様は「**近寄って棺に触れられた**」とあります。ユダヤ人は、遺体に触れることはしません。なぜなら、「**死人に触れる者は、それがどの人のものであれ、七日間汚れる**」(民数記 19:11)という律法があるからです。遺体に触れると、その人は汚れるとされていたのです。しかしイエス様は、この一人息子の遺体に触れられました。それは、死の汚れを御自分の身に引き受けられたことを意味します。イエス様は、私たち人間の死の汚れを、御自分の身に引き受けられたのです。

新約聖書のヘブル 2:14-15 に、こういう言葉があります。「**子たちがみな血と肉を持っているので、イエスもまた同じように、それらのものをお持ちになりました。それは、死の力を持つ者、すなわち、悪魔をご自分の死によって滅ぼし、死の恐怖によって一生涯奴隷としてつながれていた人々を解放するためでした**」。イエス様は、神御自身です。イエス様はなぜ人間とされたのでしょうか。それは、御自分の「死」によって、一生涯、死の恐怖の奴隷となっている私たちを解放するためであったと言われていています。イエス様は、十字架の死によって、私たちから「死の恐怖」を取り除いてくださったというのです。

16 世紀にドイツ語で書かれた『ハイデルベルク信仰問答』には、「**なぜキリストは「死」を苦しまなければならなかったのですか**」という問があります。その答には、「**なぜなら、神の義と真実のゆえに、神の御子の死による以外には、わたしたちの罪を償うことができなかったからです**」とあります。イエス様の十字架の死は、私たちの罪の償いのためでありました。私たち人間は、神様の前に、自分で自分の罪を償うことはできません。神の子であるイエス様しか、私たち人間の罪を償うことはできないのです。さらに、こういう問があります。「**キリストがわたしたちのために死んでくださったのなら、どうしてわたしたちも死ななければならないのですか**」。確かにそうです。イエス様が私たちの罪を償って、私たちの代わりに死んでくださったのなら、私たちはもう死ななくてもよいではありませんか。「**罪の報酬は死です**」(ローマ 6:23)と聖書にあります。イエス様が私たちの罪を解決してくださったのなら、私たちは死ななくてもよいではありませんか。なぜ私たちは死ななければならないのでしょうか。『ハイデルベルク信仰問答』は、こう答えます。「**わたしたちの死は、自分の罪に対する償いではなく、むしろ罪との死別であり、永遠の命への入口なのです**」。私たちの罪は、イエス様の十字架によってすべて解決されています。イエス様が私たちの罪の償いをすべて済ま

せてくださったからです。ですから、私たちの「死」は、もはや裁きでも呪いでもありません。私たちの「死」は、「天国への入口」となるのです。そして、私たちを人生において苦しめてきたすべての「罪からの解放の時」なのです。「罪の汚れをすべて拭かれる時」なのです。イエス様の十字架によって、私たちの「死」は、「絶望」ではなくなりました。イエス様の十字架によって、私たちの「死」に、「希望」の光が射し込んできたのです。

イエス様は、十字架で死なれましたが、死の力に呑み込まれてしまったのではありません。イエス様は、三日目によみがえり、死の力に打ち勝たれました。そして今は天に昇り、やがて世の終わりの時、最後の審判の時に、この地上に来られ、御自身と同じように、死者をよみがえらせます。その時に、イエス様が死者たちに言われるのが、14節の御言葉と同じ言葉です。「**あなたに言う。起きなさい**」。

死者がよみがえる時、その時に何が起こるのでしょうか。黙示録 21：4 には、こうあります。「**神は彼らの目から涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、悲しみも、叫び声も、苦しみもない。以前のものが過ぎ去ったからである**」。イエス様は母親に、「泣かなくてもよい」と言われました。イエス様は十字架で死なれ、復活され、やがてこの地上に再び来られる時、私たちの目から完全に涙をぬぐい取ってくださるのです。その時には、死も悲しみも苦しみもなくなるのです。イエス様は、一人息子をよみがえらせた後、母親にこの息子を返されました。それと同じように、イエス様がこの地上に再び来られる時、私たちも死者と再会するのです。死に分かれた、愛する家族や兄弟姉妹たちと再会するのです。

おわりに

イエス様を信じる者にとって「死」は、決して「絶望」ではありません。イエス様を信じる者には、「死」に対する「希望」があるのです。なぜなら、イエス様を信じる者にとって「死」は、「罪との別れの時」、「天国への入口」だからです。そして「死」は、イエス様を信じる者を決して支配することはできません。なぜならイエス様がこの地上に再び来られる時、イエス様を信じる者は死からよみがえり、涙を完全に拭われ、悲しみも苦しみも取り除かれ、死に分かれた、愛する家族や兄弟姉妹たちと再会するからです。

私たちもイエス様を信じてさえいれば、先に召された召天者たちとやがて必ず再会することができるのです。

天におられる私たちの父なる神様。

私たち人間にとって、「死」は避けられない現実です。しかしイエス様を信じることによって、「死」は「絶望」ではなく、「希望」となりました。「死」は、愛する者たちとの永遠の別れではなく、必ず再会するものとなりました。先に召された召天者たちと同じように、私たちも最後まで、あなたへの信仰に生きる者とさせてください。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。